

秋之部

立秋

むしりとよはれ葉おちて秋の立 鬼貫
 宿備の山伏あち男と相の秋 居中
 秋そのや響は樹毛のさう砂 浪化

初秋

誰笛うたよとらまの秋の序 由之
 くの秋や祝よと想い角力に 米缶
 初秋や帷子ひふかふ雨 毛鈍

七夕

酒も甲子とわく酒呑星今宵
早も合宿等と吟りて廻り入
七夕や梵唄備はまへ笛と聞
其角

銀河

志事申や事かたりたる天孫川
行舟のほろ勢流しての川
此處は裙よせせぬれ銀河
木因

鵲

鵲や石とおもへば橋もあま
鵲乃橋のうらまはまゐる海の
かきこもや橋もよ物と二つ目
其角
木因
貞程

燈籠

燈籠のねきと暮人とおもえん
舟も舟乃燈籠をよ舟おし
美女も美男燈籠をよ舟おし
其角

高燈籠

高燈籠をよ舟おし舟
人喜い消へたすくの燈籠をか
揚燈籠をよ舟おし舟
遊竹

迎火

迎火や揚りよ舟おし舟
むらびとよ狐の影をよ舟おし舟
其角

火

四十四

迎鐘

打つ響く物と志りて也迎鐘
抱きし撞子の鐘をむくひる

嵐雪
春富

施餓鬼

おもしろや門をわたりく施餓鬼棚
石炭よせきき如樹の山崩せり
庵の音おせせの幾方深クつか

荷兮
文里
百里

墓祭

おもしろ人も今も孫も也墓祭
盃茶も盃や也のうらふ墓祭
墓祭系ちるら柳の系も

去来
卓袋
立縁

龜祭

同一年お人もわたりりおまつり
麻乃其のころやう記玉糸
おまつり高也咲清もまつり

雲口
去来
調柳

蓮飯

禊ふてもおまつり蓮の飯
松の葉や白むらぬを蓮の飯
おまつり名をばらする蓮の飯

一髪
支考
同

麻箸

似合くおまつりおまつり麻箸
ふき人の飯をまつり売し折しり
おまつり麻木の箸もまつり

亀洞
全峯
惟然

風塵中

風塵中
梅氏
氣尾草の袂あかる月のか

生身龜

生身龜
方山
千里
生身玉をたぐりて身玉をたぐりて身玉をたぐりて

盆月

盆月
野坡
李由
同
盆月の月をたぐりて月をたぐりて月をたぐりて

送火

送火
史邦
柳江
送火の火をたぐりて火をたぐりて火をたぐりて

花火

花火
神寂
桂夕
春富
花火の火をたぐりて火をたぐりて火をたぐりて

踊

踊
安之
吉雷
尚白
踊の踊をたぐりて踊をたぐりて踊をたぐりて

相撲

都もも位まゝの意もくぬか取
お撲より並く秋の産綿
裸身よ履き白ひやお撲より

去来
嵐雪
許六

秋風

俵の也や腕の衣吹の秋の風
ちのちの也や産州の秋の色
秋風やとよまされのまうもま

野童
越人
未山

初嵐

鶺鴒の尾よほくまを初あり
初嵐の風さる小庭の嵐まきり
日よ初む来きぬは初嵐

荊口
濁子
嵐雪

暴

あまのそまを海りせらるる
温泉燦の地と這りけり
小原女何野をひくかへり

猿雖
東睡
園女

露

く川露何枝の外芝の起あり
ちりちりいけりあかしのよしの露
朱鷺啼き啼くかゝる露ある山吹

去来
孝和
舉白

霧

舟の言何き方新まのたを鳴る海
船音何とあまをわきり持の系
帆柱のあまぬや雪のしる山

其角
毛鈍
北枝

稻妻

稲妻也 靛売きく野の白
古の藤 稲妻のふかたつま
し ねばまのねばまのねばま

卧高
立吟
路健

虫

若也 虫の 鶯 追んむの
葉 洞也 二匹の中 虫の
虫の 虫の 虫の 虫の 虫の

玄梅
尚白
白空

蜻蛉

走の山 蜻蛉はわりの
蜻蛉の 顔を 知る 眼を
富たの 虫の 蜻蛉の 渡る

惟然
知足
横几

結蠶

篋 唐の 産たの 結る 山
木 蝶の 吐く 糸の 糸の
糸の 糸の 糸の 糸の 糸の

如行
淵泉
錡之

竈馬

か くる 竈 馬 竈 馬 竈 馬
曉 糸 馬 地 糸 馬 地 糸 馬
竈 馬 糸 馬 糸 馬 糸 馬

孤屋
掉哥
北枝

蛸

日 くら 山 蛸 糸 馬 糸 馬
糸 馬 糸 馬 糸 馬 糸 馬
糸 馬 糸 馬 糸 馬 糸 馬

諷竹
風麦
立祖

蛸

蛸のちびるは狗のきさし
蛸のちびるは狗のきさし

史邦
千流
十丈

松虫

松虫の白い山
松虫の白い山

沙明
嵐雪
其角

鈴虫

鈴虫の鈴を鳴らす
鈴虫の鈴を鳴らす

桃秋
桂士
其角

秋蠅

秋の蠅も温抱い
秋の蠅も温抱い

昌房
松吾
千那

秋蟬

秋の蟬も
秋の蟬も

夫中
晚山
百里

秋蝶

秋の蝶も
秋の蝶も

舟泉
言水

冬蝻

ふみあらしも志るも蝻のちりり
啼きたるも城壁をさし冬蝻
しほちりるも赤くありたるいふ

成水
拳白
風子

蟋蟀

草の葉も足の折るもさうり
ふりれいあらしもさうりも蟋蟀
戸計桶の名もさうりもさうり

荷兮
智月
凡化

柳散

あらしも折ちりるも柳
あらしも折ちりるも柳
ちりり折ちりるも柳

土芳
三平風
宗長

桐葉

きりかぬ桐のこぼれ葉の声
寒しき一度も桐のこぼれ葉
月待もさうりも桐のこぼれ葉

其角
湖水
望一

木槿

あらしも泣きも似るも木槿
あらしも泣きも似るも木槿
知乃田の中もあらしも似るも木槿

嵐葉
杉風
匏石

雞頭

鶏頭
園邊のあらしも似るも鶏頭
枯のあらしも似るも鶏頭

嵐竹
史邦
万牛

大

二

女郎花

おのれをいひしめても身はなほ
あつらふ花をいれさる地のはり
おのれをいひしめても身はなほ

濁子
呂風
松吾

薺

隣にある薺は非より下り
おのれをいひしめても身はなほ
あつらふ花をいれさる地のはり

鷗柴
戈磨
平交

秋海棠

秋海棠秋をよめる海の子は
おのれをいひしめても身はなほ
あつらふ花をいれさる地のはり

琴風
凉菟

萩

中川よそれおもひし萩の
おのれをいひしめても身はなほ
あつらふ花をいれさる地のはり

李由
志賀
去来

萩

人老ゆけ雨ははらる萩の
おのれをいひしめても身はなほ
あつらふ花をいれさる地のはり

雪芝
呂風

野菊

名もなきあつらふ花をいれ
おのれをいひしめても身はなほ
あつらふ花をいれさる地のはり
山崎の葉はきくとも又遠はり

素堂
百首
越人

芙蓉

花のさきより夕霧のさきより芙蓉さきふ
晨明のぬれてさきよる芙蓉さきふ
百合のさきよる芙蓉と語る命のさきふ

呼人
其行
風麦

蓮實飛

蓮のさきよる蓮のさきよる蓮のさきよる
蓮のさきよる蓮のさきよる蓮のさきよる
蓮のさきよる蓮のさきよる蓮のさきよる

百里
猿雖
素堂

蓼花

お蘭のさきよる蓼のさきよる蓼のさきよる
お蘭のさきよる蓼のさきよる蓼のさきよる
お蘭のさきよる蓼のさきよる蓼のさきよる

其角
風化
木節

葛

お蘭のさきよる葛のさきよる葛のさきよる
お蘭のさきよる葛のさきよる葛のさきよる
お蘭のさきよる葛のさきよる葛のさきよる

嵐竹
朱拙
山店

芦穂

お蘭のさきよる芦の穂のさきよる芦の穂のさきよる
お蘭のさきよる芦の穂のさきよる芦の穂のさきよる
お蘭のさきよる芦の穂のさきよる芦の穂のさきよる

防川
亀洞
路通

蘭

お蘭のさきよる蘭のさきよる蘭のさきよる
お蘭のさきよる蘭のさきよる蘭のさきよる
お蘭のさきよる蘭のさきよる蘭のさきよる

桃隣
嵐雪
如行

火

五十一

芒

も一切を帯帽とふる芒の申
年々古根より記すもふ
ふ若くは又とて色一お風山

荷弓
俊似
牧童

尾花

新しき尾花又折る枝のま山
吹おろし吹のちる岨の尾花山
野の物乃尾花吹とる尾花山

李下
松吾
其角

番椒

石其とて根もやあり
黄もよふ色ももやあり
熟しき植あやもやあり

野坡
胡及
央邦

谷野

山伏の切をせしむる谷野
中より川も谷も谷野
谷野の牛も人をも谷野

野坡
任口
志友

草花

草花の秋も里も持あり
下りき奇を離のちも中も
草花の秋も里も持あり

野坡
左標
調之

芭蕉

も七代も八代も後の芭蕉
秋も芭蕉のちも里も
芭蕉の秋も里も持あり

依之
加生
乙州

葛

やまの地を這ふ葛のふし
越人
桐のふしはるる葛のふし
扇雪
葛のふしはるる葛のふし
卧高

蕎麦

多れ蕎麦は夏をたたく蕎麦のふし
素堂
うす蕎麦は梅の志はるる蕎麦のふし
乙外
拙や蕎麦は夏をたたく蕎麦のふし
荒蕘

木綿

海のふしはるる木綿のふし
ト枝
山細きふしはるる木綿のふし
松吟

西瓜

内帯の西瓜のふしはるる西瓜のふし
素人
西瓜のふしはるる西瓜のふし
素堂
西瓜のふしはるる西瓜のふし
一江

瓢

豆の瓢はるる瓢のふし
沾圃
瓢の瓢はるる瓢のふし
桃状

零余子

鶴のふしはるる零余子のふし
為有
瓢のふしはるる零余子のふし
野徑

大

五十一

八朝

ハ朝也如養老のまきり
ハ朝也如養老のまきり
ハ朝也如養老のまきり
ハ朝也如養老のまきり

涉葉
許六

三言

三日月也蓋の天意をかり
三日月也蓋の天意をかり
三日月也蓋の天意をかり
三日月也蓋の天意をかり

之道
去来
素堂

月

かろくもむくも月も清光ふ
かろくもむくも月も清光ふ
かろくもむくも月も清光ふ
かろくもむくも月も清光ふ

智月
露川
胡及

待霄

待霄也羽衣の如いあすは事
待霄也羽衣の如いあすは事
待霄也羽衣の如いあすは事
待霄也羽衣の如いあすは事

牧童
羅人
同

名月

名月也折もあふふは格り
名月也折もあふふは格り
名月也折もあふふは格り
名月也折もあふふは格り

信德
轍士
湖春

既望

既望也心もあふふは格り
既望也心もあふふは格り
既望也心もあふふは格り
既望也心もあふふは格り

去来
許六
猿維

抄

五十五

后月

後の月たききう路の巻ありん
其角
其角
其角
其角

駒迎

一戸や破るも駒あり
其角
其角
其角
其角

放生會

尾を振るいかさう情を放り
其角
其角
其角
其角

初潮

さ川波や細虫さ帆け
半残
其角
其角
其角

稻花

買う稲津も持ち稲のさ
露川
其角
其角
其角

稻

稲乃きか鹿さのうは
雷得
其角
其角
其角

五十六

早稻

早稲のきや田中なるあの人出入
早稲も種をまきたるゆゑに
世のくまも七積出るゑのあり
曲翠
林紅
呂風

晚稻

根の世頃なる晩稲可申
中の中もあつたふおつては
晩稲田の種なる方本由里
支考
路健
遠水

落穂

籾の卯く種く落穂ふ
拾つて肩よ落すの事記と
禪門の好味持とる落穂ふ
其角
ト枝
木導

案字

もの言ひを倒す案字ふ
おけるも人持たのかしふ
山徳の案字作て等しり
正秀
重五

鳴子

谷越し鳴るの湯や空のうら
山圍よ小松のくや鳴るの
此村の西房階あり鳴るの
古梵
峯雪
丈中

引板

夕陽の影を引板の音
山流よのせの虹引板の
鳴り引板をよがる書も
路通
亀洞
秋色

漆水

くわくくわく漆水の端もあけふ
船を舟流水のきり道志と
虚谷 普船

鳥驚

あふ物やがしきらよきの夢
種物の俵やさくらんをかじ
一酬 凉菟

落水

秋もたやふしつるあのかき
雨乞し雨もあらしきるあ
古梵 同

落難

落難のてふふきく渡りか
あひもききくき世の嘆きの館
一桃 重頼

秋作物

桑園に果実まきき入りか
黍の穂たると述いたる色は
秋の田圃を争しきく稗二儀
越人 尚白

新酒

新酒の人の酔やき
足あらしきききく酒か
あらしき初めきく酒の筒
嵐雪 支考 虚谷

鴉

鴉啼也 僅赤らむ袖のうら
帷もふりしよ冷し鴉の聲
百舌も啼き入るや小雲魚
野水 史邦 允兆

鶺鴒

牛河も啼き鳴き夕暮那
石の山もまやかし鶺鴒の
鶺鴒実なる声もはるる
支考 言水 甫山

鶉

消そのもの影も根も啼鶉
かひもくもつも在影のうら
投網も袖ぬもまきく鶉の
五芝 琴風 正秀

木啄

木啄もきの入るもくすり
樹も木啄の日もす
木啄の粒もはくく住居の
大草 雨桐 曲翠

鶺鴒

せまもくもやまきりし
秋の日にけり鶺鴒のせ
せまもくもやまきりし
氷因 游日 麻盤

鳩

寂しき鳩もあやむるも
鳩もや太山もくもき
野水 甫山

鹿

列々鹿死て笛する大い山うか
鹿死て山をさる鹿麻の姿あふ
鹿の言ふ人の起るる夕々々
一髪

菌

茸持て杖をぬき我を回ふる
多け持て杖をぬき我を回ふる
利合

松茸

松茸や出るとも我をぬき我を回ふる
松茸や出るとも我をぬき我を回ふる
吾仲
素堂

初茸

初茸の言ふ人の起るる夕々々
初茸の言ふ人の起るる夕々々
智子
沾蓬

柿

渋柿の言ふ人の起るる夕々々
渋柿の言ふ人の起るる夕々々
呂風
正秀
具角

栗

栗の言ふ人の起るる夕々々
栗の言ふ人の起るる夕々々
立路
其角
木苗

團栗

赤栗の如き後以て過るる窟溜
赤栗の如き後以て過るる窟溜
赤栗の如き後以て過るる窟溜

杜年
其栗
為有

椎

椎拾ふ人適なるやも
中髓の椎をさるる後
ひらきぬめしむるも椎の壳

夕潮
丈中
ト

木實

松らりし木實よりなる麻の葉
椎の壳をさるるの山乃木實を

李由
嵐雪

重丸

重丸の球ありしも後以て
芝なりも後以てなる中
丸も色も後以て丸なり

観水
逢雨
桃隣

九日

余れ中にしむるも後以て
人好む白ひとも後以て
余れ中にしむるも後以て

和及
二水
浪化

菊

赤栗の如き後以て過るる窟溜
つ色や此方よりなるも
花立ち力やなるも葉の圃

昌碧
曉龍
軒柳

残菊

とねまじりしきまのふれ菊と枕山
菊のふりし酒とまじりしきまのふれ

素堂
望水

持衣

昔のきぬを灯のゆりけの宿子
まのなまはるを衣あるまのなまの
小の袖の脇伴らひしきまの宿

立志
奉白
横几

露時雨

糸臺へ酒よりのほや露時雨
涙のあやあのをほほの露時雨
ふれしれ川静しき寺はさる

北枝
文中
遠水

秋雨

ぬいぬい雨も糸あらしき秋のぬ
秋の雨時そ風鳴り人も糸
秋の雨ちりしきまの露とたらしき

尚白
野水
奉白

紅葉

小田かかきけあし下糸糸
かみかみし清の葉もたのむ糸糸
あふ糸の糸糸もて糸の袖の糸

秀和
其角
八木

秋夜

秋の夜は糸糸の油さし
秋の夜と糸糸も糸糸の糸糸
糸糸と糸糸糸糸の糸糸と糸糸

好春
許六
末山

長夜

もろもろと旅中ふりて寐さき危
くも申目とてつづきおきと枕山
つまじりいひもくぬりぬかぬき
野水

夜寒

あゝ寝るは秋の道はくおきぬ
ね月よ秋酒とさぬぬおきぬ
ともすれのおもはつぬぬおきぬ
支考
畦上

鴈

かきさよよきぬをさよよぬのう
物もやよのえたるもぬのう
くくぬとつさもぬのうぬ
鬼貫
松吟

秋暮

僧のひる礎の簾也秋のさる
秋のさる灯也さるんと問もさる
立ぬくく一ぬさも秋乃夕
嵐雪
越人

行秋

けり秋よさる行もぬき裕の那
けり秋よぬさる行の物もぬ
ゆり秋と胡るは糸のうらぬ
乙外
杜年

秋雲

新橋よま回のうへの秋の雲
行も申もぬかぬさる秋の雲
山くやつ美もぬさる秋の雲
涼菟
酒堂
支中

人

六十一

築

いりまゐる魚の栖やしくは築
築やまのいりまゐる魚の栖

本草 防風 心水

渡鳥

釣舟やとる魚のいりまゐる
山や舟やとる魚のいりまゐる

本草 去来 本草

鯉

啼やうとやうと啼よの鯉の
川やうとやうと啼よの鯉の

一口 涼菟

未枯

う枯や馬と餅やふく魚の山
未もやあひのえとあつるす

其角 五峯

冬之部

初時雨	<p>初時雨の初は杉の葉の初時雨 初時雨の初は杉の葉の初時雨 初時雨の初は杉の葉の初時雨</p>		<p>初時雨 初時雨 初時雨</p>
時雨	<p>時雨の初は杉の葉の時雨 時雨の初は杉の葉の時雨 時雨の初は杉の葉の時雨</p>		<p>時雨 時雨 時雨</p>

志卷

志の白紙おもひと懸るる松の
多し尔傘持たさるる志巻の
松芳 園指

口切

口切の赤くも物もあはれ
口切や袴はひらの織は葡萄
木導 其角

爐開

炉はひもきや基目とぬお柄投の
海軍の目と標ゆりのを業の
同 嵐雪 山店

炉

炉をせくなく有るる
木の葉たけ海を淋きひる
一髪 山峯

火桶

火桶抱て瀨嶽をがくも
老志のあけきくもおの柄
露言 園女

火鉢

火鉢の赤も赤も赤も赤も
葉の赤も赤も赤も赤も
秋色 楊水 芦本

巨燧

傳... 巨燧... 桃志
雪志
我峯

炭

山... 炭... 嵐
戰竹
其角

炭竈

炭竈... 炭竈... 不炊
子冊

堧

堧... 班車
巴人
神寂

櫓

櫓... 荷
去来
探志

十月

十月... 幽也
尚白
来山

神無月

鶴の指の神中を抗よ神の母
山店
禪も此の世の底際也神を丹
元北
神を丹打焼経巻の巻たる
言水

神送

神皇の牛の角をきけ神をこ
卜枝
高の足はあつた神をこ
越人
神をこり巻たるを丹に
酒堂

神聖

神もやまをこりて神の巻を
李卜
神の巻をこりて神の巻を
神寂
神皇の巻をこりて神の巻を
涼菟

小春

小春の巻をこりて神の巻を
言水
神皇の巻をこりて神の巻を
李由
神皇の巻をこりて神の巻を
路通

達磨

達磨の巻をこりて神の巻を
竹良
神皇の巻をこりて神の巻を
梅葉
神皇の巻をこりて神の巻を
李由

十夜

十夜の巻をこりて神の巻を
路通
神皇の巻をこりて神の巻を
杉風
神皇の巻をこりて神の巻を
許六

御影講

清い影講は神の心への御祈
神も神も扱まれまう御合講
上人も影講も御おけ清い影講

買夷 沾圃 史邦

御取越

あすまの御取越乃身も御清い影
松の御取越乃身も御清い影
清い影講は御取越乃身も御清い影

芭字 養誥 嵐竹

蛭子講

此の御取越乃身も御清い影
生葉の御取越乃身も御清い影
酒桶の御取越乃身も御清い影

去来 ひと 李由

神迎

何れも御取越乃身も御清い影
清い影講は御取越乃身も御清い影
神迎の御取越乃身も御清い影

如琴 當覺 珍碩

顔見世

顔見世も御取越乃身も御清い影
の御取越乃身も御清い影

其角 諷竹

吹草祭

吹草祭も御取越乃身も御清い影
掃草祭も御取越乃身も御清い影
清い影講は御取越乃身も御清い影

李由 諷竹 李濃

冬立

つがの小家も枯らふをまじく申
らざる意あつたよき事なるを
まゐるはつす伸し冬立の節

元兆
乙外
仙窟

風

木のこゝろの月も吹かぬ
こがれや里のまねくは雲の屋
風をたぬくことまらふ小家の

荷兮
尚白
残香

冬立

萱草の便りもあつた
砂まじり海苔の人の冬立
心も僧かゝるまらふ

琴風
元兆
卜千

冬山

鶯の暮れもあつた
狼も吠く雪の冬山

素牛
氷巻

冬日

冬もあつた
冬の身もあつた
民もあつた

友立
諷竹
洗悪

冬月

魚店もあつた
月もあつた

其角
里東
我眉

冬夜

仰ぐ如く冬夜儘ささるる夜あり
冬の夜乃月夜中へ雀とも

其角 素風

冬篋

冬の篋あるを舟に山月
冬の篋は行旅してあきの海舟
冬の篋は遊業の売のたまはる

杉風 彫棠 野水

冬構

古年の篋賣も青くうらまへ
梅のよみ流はまらぬあかまへ
冬の篋はうらまへを延せあかまへ

凡北 西梁 程巴

寒椿

いつきも一庇おこせのまはるき
冬の椿はうらまへを延せあかまへ
火焼くもあかまへを延せあかまへ

亀洞 木因 同

枯菊

色くの菊つきの枯あまり
おれは菊枝をうらまへを延せあかまへ
菊売はうらまへを延せあかまへ

柳水 嵐雪 杉風

寒菊

冬の菊の色は何もあまり
かん菊は古流流く日如の菊
寒の菊は流くもあまりを延せあかまへ

湖風 嵐竹 許六

七十一

桔芒

小坊うらも旅人のまじり桔ささき
日あききき 桔垣ゆるの桔芒
氣をけけつる桔芒 桔芒
配力 一髪 杉風

水仙

ふの地のさのうらまはるる
水仙さあつひくもれ
ふの仙やうと安房の仙使
惟然 一品 專吟

茶花

木犀の茶の花ゆり折まきま
茶のさき世もゆりぬ白しう茶
茶の色もさきまきま
猿雖 正秀 色風

石落

破まき糸の石落よ顔むら
石の石もまきまきま
胡友 諷竹

帰花

帰花さるれもまきまのん
つ輪の雛もゆのうらま
何のゆりうらまはるる
其角 曲翠 未山

茶山花

山茶花よ懐き帰まきま
山茶花や水もたきま
山茶花や水もたきま
言水 李農 栞士

三十一

枇杷

農明の朝すまきも枇杷の宗
いつていけぬまきもいそ枇杷
山よりまきも練つてまき枇杷の宗
及松

冬符

冬牡丹定るるおきこけりまき
もれうもおのるんの一いつ候
うまきあつるちれまきまき牡丹
杜旭

木葉

たつこのふれおまわらぬ色
おもひかしのふれおまわらぬ星の敷
岩のふれおまわらぬまき
其角

落葉

義忠の落ひ乃紫さへ落るる
落葉あつる浅色まきまき
ちりおれおまわらぬまき
巴風

枯柳

何れもあつるまきまき
余のまきもあつるまき
越人

蕎麦

蕎麦あつるまきまき
あつるまきまき
桐貫

交時

交時... 山... の...

昌碧 漁弓 一井

大根引

大根引... 今や...

風國 俊似

下菜

下菜... の...

一峰 探丸 次村

葱

葱... 雨橋... 百花... 次村

蕒

蕒... 蕉笠... 依之... 松芳

霜

霜... 杜國... 吞舟... 全峰

霜夜

つらも初くものけきお夜か
尺中
山火とるれ響ぬいお夜ふ
其角

霜柱

おろろらにうあけしち毫
野童
はりくとお散後しををうら
凍鬼

千鳥

脊戸をぬ入りのちるぬつふ
夫中
志き波ふるき揃ふる千鳥
冬柏
荒破也まると別ふる友ちるま
去来

水鳥

ふもれお満る也つこほいぬ
揚水
ふもれおかひるぬよれ山風ふ
倫女
ふもれおあをぬるこ山回の那
湖風

野鴨

ふもれお中鴨啼白雲の林こふ
丸磨
ちもれおと大退つる境可申
芥木
鈴鴨の聲ぬりちる海き
嵐雪

鴛鴦

も〜ゆ〜あ漬ぬるぬをうれ
雷虫
袋土の刃ぬる方也央るるれ布
木節
後なき川人よををぬれぬの響
野水

鴈

鴈細や氷の下農かおけさる
椋木とくらくと多たさのわつり
後波は非運をぬくうかつり

紫車
更明
次村

鶺鴒

雪乃日と曇うとあそく我はあ
鶺鴒赤と白とあそくつるあ
雪とふ雪とせとせりこをはあ

依之
祐補
許六

鷹

玲姉とつねとあそく冬と山
爛熳と雪とあそく眼のひるあ
雪と雪とあそく志のひるあ

冬市
木導
遅雲

暖鳥

ゆめあそくあそくのあそく
暖鳥とあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそく

丹丘
柯上
藤白

木兔

みづはあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそく

茨境
半残
葦中

追鳥狩

追鳥とあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそく
あそくあそくあそくあそく

一峰
史邦

冬蠅

存人金し惜もふりまの蝶
生し花し多し指のこもみ蝶

史邦
嵐亭

冬鱒

鱒鱒の腹を何ふしうぬふ
あへくしと先流なる尉の事

其角
莫陵
山夕

空鞋

うら鞋や死する時の口をわさ
束ふりか鞋作ふ前ふゆ
空鞋やうら雪降る魚の店

雪芝
乙外
除風

蛎

まらぬもも蛎は海に揺るとも
かきむも見ぬれも汐くも
うすくひも揺も蛎のこも

嵐雪
其繩
荻子

夜興

あめまきも夜興のたれは鏡の
ふらふらも夜興のこも
三日月よおもしほもいも

氷巻
工齋
奉白

河豚

ゆけけも米買ふもいも
饅けよ又本草の吐くも
ふくもいもいもいも

檀泉
其角
八橋

鱈

かたきをきくと鱈はさるる山原に
さしきりしや沖の釣場は二百尋
鱈舟や比らふより北と云ふ氣色

和重
岡指
李由

生海鼠

属鼠のむすふあさこ生海鼠子
生海鼠喰ひきりぬきものほほほ
むくはききりし海鼠や効く物法

去来
嵐雪
露沾

鯨

鯨撃くくくくくくくくくくく
今世のまゆゆのくくくくくく
鯨突く男と闘ひ喰ちりり

野坡
吉女
万年

網代

静さを珠数もあまの網代
川つてもあまの網代も
あまの網代もあまの網代も

丈中
其継
林長

霖

あまの霖はあまの霖はあまの霖は
あまの霖はあまの霖はあまの霖は
霖やこもあまの霖はあまの霖は

卯七
暮年
杜旭

寒

あまの寒はあまの寒はあまの寒は
あまの寒はあまの寒はあまの寒は
あまの寒はあまの寒はあまの寒は

桂之
木導
卧高

冬

三十八

寒中

寒中も脾胃のはさまる中
也木槲のあはれはさるの中
千川 浪化

寒声

寒声のあはれはさる中
かんたうのあはれはさる中
仙杖 加枝 乙孝

寒垢離

寒垢離のあはれはさる中
くんとあはれはさる中
路通 母風 取具

眠

あはれはさる中
眠のあはれはさる中
氷花 吾東

薬喰

薬喰のあはれはさる中
信也世と悟り
支考 山夕 芦本

納豆

納豆のあはれはさる中
毒の枕のあはれはさる中
汀芦 除風 夾中

紙衣

文アミミイ 我衣の切と讓ク
油引一ツ 時雨の道一紙衣
衣ミミミ 相見紙衣を張む

大巾 只吟 舟行

頭巾

隠き家阿片 耳より角巾
巾中分 巾中分
巾中分 巾中分

蟬吟 毛純 其幄

衾

何事も寐入るまゝ 巾衾
ほきと寝の深き 厚き衾
あつ衾 甚き海も 巾衾

小春 尚白 千邦

足袋

古足袋の早又 口ふとふと
雨くく 固く足袋ぬ 寐衣
足のいそぎ いらぬ 足袋いそぐ

嵐雪 巴雪 月下

湯婆

産乳女の湯婆 如はん 袴の湯
湯婆 湯婆 湯婆 湯婆

嵐渾 正秀

初雪

初雪 如人のきき 朝の雪
初雪のこも 初雪のこも
初雪のこも 初雪のこも

桃隣 利牛 紅雪

八

雪

窓の心と打や雪は所
雪は目や雪は目雪は目雪は目

去来 猿 雪

霰

門外又傘たむこれか
松松よららあきこる霰の形

斧鉄 去来 画好

雪吹

川より吹く雪は雪は雪は雪は雪は
海山は雪は雪は雪は雪は雪は

去来 乙列 湖春

霰

橋欄の雪は雪は雪は雪は雪は
雪は雪は雪は雪は雪は雪は

野童 嵐雪 好春

標

標の雪は雪は雪は雪は雪は
標の雪は雪は雪は雪は雪は

會台 一井 長虹

櫛

櫛の雪は雪は雪は雪は雪は
櫛の雪は雪は雪は雪は雪は

道達 嘯花 紅紫

氷柱

暮よあま〜幕のけらうか
川越一馬の尾より氷柱
帆柱の氷柱をすくは朝日系
其角

氷

枯草より氷を踏むお汐ふ
豆代や櫓より氷うすす氷
苔蓼
許六

凍

凍はまの凍有けうのふ篠の凍
う〜ゆも魚よりとる魚死凍
去〜え死ぬ身の凍は柱を記
秋之坊
氷央
其角

神樂

嵐より女哥もぬ〜神〜
去〜去ある神と男死からうか
神神樂といふと禁く坊主は去
去来

寒念佛

晴のりいぬは〜
け〜了る喜〜を佛のあまの非
あ〜をぬ〜の掃木ぬ〜をんを仏
支考
鹿臺

鉢扣

鉢〜〜記〜をん〜似ぬ〜の
〜らた〜き〜あるお茶釜は〜の殆
〜〜ぬ〜き〜ぬ〜華〜ら〜を〜神打
乙外
山峰
去来

八

八十一

臘八

子家国のもつま八日如空を序
臘ハヤシクお難炊のそまの味
臘ハをゆらたらきと御打
杉風
惟然
木導

御佛名

斬かき清き罷ふと御佛名
老らるる早とまきし御佛名
佛名のれは徳とふ徳と申
好らるるそまの目と夜佛のそ
煤拂の破らるる雪のそ
家くもかそ残るる煤拂
落桐
去来
野水
不卜
嵐策
祐圃

煤拂

藁奪

月かふる事とそまの節事
せまの節夕日ははく成持
節事とそまの節と退ある
一洞
浪化
惟然

師走

山伏の名事とそまの節事
確り新とそまの節事
うちあふる小豆も市如砂を
嵐雪
紋水
正秀

餅搗

餅搗やとそまの節事
もち屋もあつりかきと節の餅
餅はまの艶とあつり
嵐雪
佳峯

年忘

年忘の意より桃農好しむ
何れに以て此もあやふ年忘
自りて道筆貫垣意しし神光

洒堂
曲翠
竹亭

曆賣

古曆布しき人よらまのきん
已るの元光ともまふし曆賣
櫛くも意ししはもこ曆うら

孤屋
如髮
嵐雪

年市

年市市河ふ物うら山家入
月くたしき元光のりし年市

魯高
涼荒

豆離

豆をいりかき中ねるさしうか
うは豆もまめあつた御言う系
むうしきか今もか之福年の豆

其角
亀洞
智月

年暮

御の尾と控えきまことし
厚りたれてまはむしら年の暮
年の暮る彼も袴のいりしうら

正秀
其角
杉風

衣配

衣配の先種ねるうらうら
くもし層あまのうら持衣うら
衣配いしうらあまの世日あ後

曾良
山峯
望翠

園見

園見とて妹はくろひ勢ふ勢ふ
ふきふふ一雪と都の園見は

嵐雪
元北

待春

待まきや松子掛ふ書紙小口
まきちのく櫓つゝかゝる茶畑は
待まきや氷も融る魔ちのこ

浪化
亀洞
智月

行歳

行年よとてとぬくはさう
りりも親ふおぼえを隠し
ゆきまのゆきの舞ふまの碎雪

湖春
越人
沙明

大年

大年も親ふ儀のしりし
同一人よ亦過年紙ひと日
雀のつらむ日しやめさる大年

万年
仙花
其角

跋

探遠末題兮兔也角與案矣尋古未
 人為為宗言端之文焉有尤則何一條
 捨之而有孰所可求艸帛焉哉雖
 芭蕉翁大名從人形天皇之頃時宗
 喫河豚止時公迨者風儀不全穩
 了共至元錄之始而調委具劍矣
 然則春秋菴白雄居士摘公其色之
 花盛耳而集五百題之裝句字而於

成一卷^ト幸^レ今年也昨烏子嗟^テ而世干
朽^レ乎鏤^レ梓^レ亡師手向^テ靈前亦此道之
不^レ善^ス哉示^レ云

文化丁卯秋

栗齋

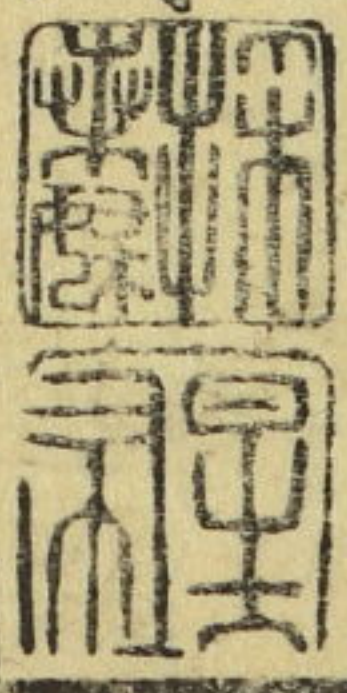
八雲誌



跋

古^ク秋^ノ尾^ノ名^ヲ能^ク亡^シの^ノ權^ニ集
の^ノ五^ノ句^ノ也^ト年^ノ十^ノ有^レ七^ノ粟
此^レ臨^レ痛^クの^ノ為^ニ子^ノト^シて^レ好^ク亡^シ存^レの
明^クる^ル一^ト梓^ノ鏤^ルは^レ亦^レと^レ懐^クは^レ云

予の著る所は行世の事ならず
 未だちとまのそなる世なり
 好む人々自づつ記さく
 真の心よりしるをたす
 松の尾をたす
 浅草南馬道可
 東村中蔵



東都書林文生堂藏板目錄

浅草南馬道可
 東村中蔵

俳諧叢句類題

雪中庵完未評
 氷黒庵家松授

全四冊

同 增補叢句類聚

青願廬了補著
 氷黒庵家松再授

全四冊

同 古入五百題

松露庵著
 全二冊

同 續五百題

近刻

同 叢句五百題

白雄房著
 全二冊

同 近人五百題

近刻

釋迦一代記

釋入
 全三冊

うき雪物語

全二冊

淺草名靈抄 全一冊

同御境内絵圖 一枚摺

此書ハ當山親世音此の縁記并諸堂社の由本とありくありはけし絵圖を附す

新撰 花形赤秀草 増字 大金高賣伝来

此書ハ古本より世に流布すといへども諸高賣の品文字サレ仍て此度増字一冊に増字を改めを蒙一冊とす

御世話千字文

荻野忠邦筆 世話文字をふま集めを蒙の一冊とす

全一冊

蘇東坡虎丘詩帖 一面摺 一帖

九四孝和解 全一冊

京三条通寺甲丁西へ入

菊舎 太兵衛

大坂南本町二丁目

葛城 長兵衛

今心齊橋北久太郎町

鹿 寫忠兵衛

江戸本石甲

西村 源六

同所十軒店

英 平吉

同淺草南馬道町

栗村 半藏

